

本書は、すでに発表されてきた論文がもとになって構成されてはいるが、大きく手直しされ、改めて、世俗化した日本社会や世俗主義を問う(第I部)、その目を広く世界に向けて、グローバル化した世界における宗教と政治の関係を主にキリスト教とイスラームの世界観を例にとりて論じている(第II部)。

著者は、序論の文頭で、日常会話において、特に初対面の人との会話のタブーとされる二つの事柄「宗教と政治」は、人の信念に深く関与しているために、その議論が険悪な関係になる場合もあるが、いきなり「あなたは何を信じているのか」と問われることもあるという。なぜなら「どの宗教であっても、信仰心の厚い人々にとっては、宗教は自己のアイデンティティの基礎となっているだけでなく、異質な他者との関係を模索する重要な手がかりとなる」からであるという。そして、

時としてタブーとなる事柄に、あえて積極的に向き合うことの意義は何であろうか。宗教も政治も、扱いを間違えれば、強い「拒絶」や「排除」の感情を生み出す。しかし、ひとたび信念レベルの関係が構築されれば、国境や人種の違いを超えて、相互の「受容」と「寛容」を生み出す。このように相反する極性を合わせ持つ対象を、できる限り客観的に見ることができれば、人間心理の不思議な深層を垣間見られるだけでなく、この世界が特定の価値観によって統合されたり、引き裂かれたりする歴史的現実を、より幅広く視野に収めることができるはずである。

と、「相反する極性を合わせ持つ対象を、できる限り客観的に見ること」の有用を語る。そうして、「宗教と政治」「宗教と暴力」「世俗化とは何か」「世界は世俗化しているのか」「世俗主義の歴史的背景」を手際よく説明している。その最後には、「本書の目的」として、ウェストファリア体制〔主権国家の領土権と主権国家による相互内政不干渉の原則〕を通じて再定義された宗教概念〔宗教を公的な領域から私的な領域への移行、宗教を個人的な信仰心のレベルに限定〕は、今や流動化しているので、「世俗主義が設定した個人と共同体の分離、信仰と実践の分離、私的領域と公的領域の有効性と限界を、今あらためて問わなければならない。」とする。また、西洋世界の宗教的な多様化や複雑化した宗教と政治関係への解決策として提示された多元主義に関しては、どの宗教も平等に価値を認めるという単なる相対主義や、宗教的言動を公的領域から排除するだけの世俗主義では今日的な問題は解決できないとする。

第I部では、主として近代の日本が、西洋的近代に遭遇した非西洋的世界の例として取り上げられている。近代日本が経験してきた近代化や世俗化(政教分離)の影響やその作用が、どのようなものであったのかが述べられ、キリスト教や西洋がもつ「一神教的世界」をどのように見ていたのかが分析され、議論される。第II部では、それとは反対に、一神教的世界から「多神教」で「非西洋」の日本がどう見えていたかが分析され、そこでは、日本固有の問題も浮かび上がってきている。

また、「宗教概念は、その内部からの自己規定と、近代国家による外部からの政治的規定の両方を否応なく引き受けている」。特に、近代以降、国家主権との関係抜きに語ることがで



きない宗教の中の政治的メカニズム、政治に潜む宗教性、宗教と政治の関係に光をあて、宗教と政治の複合的な相互関係を問うことが、「宗教のポリティクス」に込められた意味であると著者は述べる。

本書の出版に際して、『京都新聞』のインタビューを受けた著者は、老若男女を問わず、生きづらい時代になった今こそ、「われわれが持つ価値観を相対化する宗教の知恵が必要だ。お金があればハッピー、なければガッカリのような世界観から、自分の生き方を再肯定・再解釈する宗教のあり方こそ求められる」と答えている。宗教と人間存在の意味や己のアイデンティティ認識のためにも一読をお勧めしたい。

なお、本書の目次は以下の通りである。

序論	
第I部	近代国家にとっての宗教—近代日本を中心に
第1章	宗教を規定する政治力学 —国家・科学との関係の中で
第2章	近代日本における政教分離の形成
第3章	日本型政教分離の構造
第II部	グローバル社会の中の政教関係 —一神教世界を見据えて
第4章	一神教と多神教をめぐるディスコースとリアルポリティーク
第5章	宗教の多元化と多元主義 —一宗教の神学の課題
第6章	信仰の土着化とナショナリズムの相関関係
結論	